

日本サッカーの今

——世界で結果を残すには何が必要か

今野 翔太

(黒木 雅子ゼミ)

目次

はじめに

第1章 サッカーの歴史

- 1 サッカーの始まり
- 2 世界のサッカー史 (欧州、南米)
- 3 日本のサッカー史

第2章 日本サッカーの現状

- 1 Jリーグ
- 2 海外リーグとの比較
- 3 国内組と海外組の選手
- 4 アジアにおける日本サッカー (予選)
- 5 世界における日本サッカー (W杯、オリンピック)

第3章 日本のサッカーをとりまく環境

- 1 日本のサッカー施設、設備
- 2 選手の育成
- 3 メディアによるサッカーの取り扱い方

第4章 日本女子サッカーの現状

おわりに

参考文献

はじめに

サッカーは世界で一番ポピュラーで、人気のあるスポーツであると言われている。どの国や地域に行ってもナショナルチームが存在し、2017年10月30日現在では211の国と地域が国際サッカー連盟 (FIFA) に加盟している (FIFA 2017)。他の競技の加盟国数や国連加盟国数と比べても、FIFA に加盟している国数の方が多いのである。このことからサッカーが世界的スポーツであるということがわかるだろう。

そのような世界的スポーツであるサッカーの中で、最高峰の大会が存在する。それは、ワールドカップ (以下: W杯) である。W杯とは国際サッ

カー連盟 (以下: FIFA) が主催する、ナショナルチームによるサッカーの世界選手権大会のことである。

前述したように、FIFA に加盟している国の数が多いため、サッカーW杯の規模は、どの競技のW杯に比べても圧倒的な規模を誇る。競技人口だけでなく、視聴人口で見ると、W杯の世界の視聴人口はオリンピックの視聴人口をはるかに上回り、また、あらゆる競技を合わせてもW杯の視聴人口には及ばない (スタジアムに行こうっ! 2010) くらい視聴人口の規模も大きいのである。サッカーのW杯で優勝することは、国にとってもまた、全世界の人々にとっても輝かしい栄光なのである。しかし、私たちが住んでいる国=日本がW杯 (ここでは男子) で優勝したことは一度もない。

ではなぜ、日本サッカーが世界の舞台で勝つことができないのか、日本サッカーの今はどのようになっているのか、現状と課題を分析する。

第1章ではサッカーの歴史について、日本と海外を比較し考察する。第2章では現在の日本サッカーの現状について、海外と比較しながら5つの側面を考察する。第3章では日本のサッカー環境について、3つの観点から考察する。第4章では男子だけでなく、日本女子サッカー (なでしこ) の現状を分析し考察する。「おわりに」では全体をまとめ考察し、筆者なりの結論を述べていきたい。

第1章 サッカーの歴史

1 サッカーの始まり

サッカーの起源は、12世紀のイングランド(英国)で行われたモブ・フットボールだと言われている。このモブ・フットボールとは、ルールのない格闘技的なスポーツのことで、祭りの日の行事として行われていた。「相手のゴールにボールを入れた回数が多い方の勝ちである」というルールや「殺人

しなければ何してもよい」というルールしか存在しなかったため、参加人数の制限がなく、何百人もの群衆が参加し、制限時間もないため一日中続けられることもあった。また、殺人以外は何してもよいため、殴り合いや蹴り合い、噛みつき合いなどといった大乱闘が発生することもあった。

それくらい危険で乱暴なスポーツであるモブ・フットボールは、1314年にイングランド王エドワード二世によって出された法律で禁止されてしまう。また、16世紀の女王エリザベス一世は、フットボールを行ったものを一週間牢に入れるだけでなく、教会に連れて行き償いをするように強要した。このような政府からの脅しによって、イギリスのフットボールは禁止されることとなったのである。

禁止され続けたフットボールは17世紀の初めに再び合法となり、19世紀にはスポーツとしてルール化が始まった。フットボールのルールを決めるべく議論がなされたが、合意に至らず二つの陣営に分かれた。一つが「手を使わない」というケンブリッジ大学のルールを支持する人々、もう一つが「ボールを好きに持てる」というラグビースクールのルールを支持する人々である。この両者は合意しないまま、ケンブリッジ大学のルールを適用したのがアソシエーション・フットボール（以下：サッカー）、ラグビースクールのルールを適用したのがラグビー・フットボールと分離された。その後、世界最古のサッカー協会であるフットボール・アソシエーション（以下：FA）が設立され、サッカーの統一ルールの作成を行った。これにより、近代サッカーが誕生し、イギリス各地に広がり、世界中にも広がったのである（たなか 2016）。これがサッカーの始まりである。

2 世界のサッカー史

世界のサッカー史では主に、欧州（以下：ヨーロッパ）と南米を中心に見ていきたい。この二つの地域を中心に見ていく理由としては、4年に1度行われるW杯（1930年ウルグアイ大会～2014年ブラジル大会）で優勝したことがある国はすべてヨーロッパの国と南米の国だからであり、この二つの地域のサッカーの歴史を見ることで、日本とどのくらい差があるのか、どれくらい歴史が違

うのかというように見比べることができ、考察に繋がると思ったからである。

まず最初に、サッカー発祥の国＝イギリス（イングランド）が属しているヨーロッパのサッカー史について見ていく。1863年にイングランドがFAを創設したあと、次にフットボール協会を立ち上げたのは、スコットランドであった。1873年のことである。こうしてイングランドからスコットランドへとサッカーは伝わっていき、西はアイルランド、南はフランス、ベルギー、オランダへと次第にヨーロッパ各地でサッカーというスポーツが浸透していったのである。

それまで娯楽の一つであったサッカーは、クラブといったものはなく、街などに住んでいる市民が集まってグループを作り、サッカーを行っていた。その後、イングランドで世界最古のサッカークラブであるシェフィールドFCが1857年に創設され、次第にサッカークラブやチームがイングランド全土で数々と創設されていった。そんな中、1885年にFAがプロクラブの結成を認め、実力上位のクラブはアマチュアからプロへと変わっていった。そのプロ化したサッカークラブも次第にヨーロッパ各地で創設されていき、プロによるリーグ戦などといった大会も始まっていった。

このように早くからサッカーが浸透していたヨーロッパの国々は日本と比べて、圧倒的なサッカーの歴史において差があるのである。また1930年から始まったW杯の歴代優勝国を見てもヨーロッパの国は20大会中11回優勝している。

筆者がこのW杯歴代優勝のヨーロッパの国で注目したいのは、全体的な優勝回数だけでなく、優勝している年代である。1940年代は第二次世界大戦の影響で開催を中止したものの、1930年代、1950年代、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代、2000年代、2010年代とすべての年代のW杯で優勝しているのがヨーロッパの国々なのである。このようにヨーロッパの国々は時代が変わっても常に優勝し、また歴史もあるという点から、世界のサッカー界においてトップクラスのレベルであることがわかるだろう。

次に、サッカー王国ブラジルが属している南米のサッカー史について見ていく。南米の国々はヨーロッパの植民地であったこともあり、ヨー

ロッパからの移民によって早くから南米にサッカーが伝わっていった。

南米におけるサッカークラブの創設もヨーロッパと同様、19世紀後期から次第に創設されていき、プロ化やプロによるリーグ戦などといった大会も始まっていった。また、W杯の歴代優勝国を見ると、南米の国は20大会中9回優勝している。

ブラジルがサッカー王国と言われる理由は、W杯で最多優勝回数を誇っているのも関係しているだろう。また、ウルグアイは1930年の第1回大会で優勝しており、このころからヨーロッパの国々に引けを取らないくらいのレベルを擁していたと考えられる。このように南米サッカーはヨーロッパよりサッカーの歴史は浅いが、早くから世界的な大会で結果を残していることから世界のサッカー界を引っ張っていることがわかるだろう。

3 日本のサッカー史

つぎに日本のサッカー史について見ていく。日本にサッカーが伝えられたのは、1873年（明治6年）であり、イギリス海軍教官団のA.L.ダグラス少佐と海軍兵が来日したとき、東京・築地の海軍兵学寮（のちの海軍兵学校）で日本人に訓練の余暇としてサッカーを教えた、と言われている。その後、東京の高等師範学校に「フットボール部」ができ、神戸の神戸尋常中学校（現：神戸高校）や御影師範学校などにサッカー部（当時は蹴球部）ができ、徐々にサッカーが広まっていった。1918年には、全国高校サッカー選手権の前身となる日本フットボール大会や、東海蹴球部、関東蹴球部などの多くの大会が開催されるようになっていった。そしてその翌年の1919年に、イングランドからFAシルバーカップが寄贈され、それを契機に大日本蹴球（しゅうきゅう）協会（現：日本サッカー協会）が設立された。

こうして見ると、日本は世界的に見れば早くにサッカー協会が設立されており、歴史があるように見える。しかし、ヨーロッパや南米の国と比べてサッカークラブの創設が遅かった。日本最古のサッカークラブは、1917年に創設された東京蹴球団で、そこから次第に全国各地でサッカークラブが創設されていったのでリーグ戦の創設も遅かった。また、これらのサッカークラブはアマチュ

アのクラブであったため、アマチュアリーグやアマチュアの大会しか開催されていなかった。そのためヨーロッパや南米といった地域に比べ、日本は、サッカークラブのプロ化やプロによるリーグ戦といった大会の開催が大変遅かった。

このように日本サッカーは100年以上の歴史があるにもかかわらず、プロクラブやプロリーグの創設が遅れたことでヨーロッパや南米の国々と大きな差がついてしまったのである。日本初のプロによるリーグ戦が始まったのは1993年のJリーグからであり、同時にプロクラブが日本に誕生した。現在からたった24年前の出来事である。イングランドと比べてみると約1世紀近く遅れていることになる。

このプロによるリーグ戦やプロクラブの創設がヨーロッパや南米の国々に比べて遅かったことは、日本のW杯出場にも影響をしている。日本はアジアの予選でもなかなか勝ち上がれず、ようやく1998年のフランスW杯で初めてW杯に出場することができた。その後、5大会連続でW杯に出場しているが、大きな結果は残せていない。最高成績は2002年と2010年のベスト16で、1998年、2006年、2014年はグループステージ敗退である。

もし、日本サッカー協会が設立された1919年の10年後くらいに、日本でプロクラブやプロによるリーグ戦が開催されていたら、ヨーロッパや南米の国と同じようにW杯といった世界大会で結果を残していたかもしれない。「歴史」という点で、世界との差が開いてしまったのではないかと筆者は考える。

第2章 日本サッカーの現状

1 Jリーグ

1993年に日本でプロサッカークラブによるプロのリーグ戦＝Jリーグが開幕した。初めは10チームしか存在しなかったが、年を重ねるごとに増えていき、現在では54チームがJリーグに所属している。その54チームはJ1（一部）・J2（二部）・J3（三部）とカテゴリーごとに分けられ、ホーム&アウェイの総当たり戦でリーグを行うという方式をとっている。

Jリーグは一年を通してリーグ戦が行われ、J1

全18チーム中、成績下位3チームはJ2に降格し、J2から成績上位3チームがJ1に昇格する。この時、J1基準の施設や資金の保持といった証明であるJ1ライセンスを持っていないと昇格できない。J2も同様に成績下位2チームがJ3に降格し、J3から成績上位2チームがJ2に昇格するという仕組みである。この時、J2ライセンスを持っていないと昇格できない。これは一年ごとのリーグ戦の成績によって昇格と降格が決定する。

そしてJリーグの下にはJFL（ジャパンフットボールリーグ）と呼ばれるリーグが存在する。JFLとは実業団や企業、アマチュアクラブといったサッカーチームで構成されるリーグのことであり、成績や資金といったJリーグ加入条件を満たすとJ3に昇格していくという仕組みである。

このようにJリーグはピラミッド型の構成をしており、レベルの高いチームほどピラミッドの上層部に位置している。また、ピラミッド下層部のアマチュアチームでも成績や資金、施設といったJリーグが定める基準をクリアしていけば、Jリーグに所属できるのである。

2 海外リーグとの比較

様々な海外リーグがあるが、特にイングランドのプレミアリーグ、スペインのリーガ・エスパニョーラ、イタリアのセリエA、フランスのリーグアン、ドイツのブンデスリーガは世界の五大サッカーリーグと呼ばれ、規模やレベルなどといった様々な点で桁違いのクオリティーを誇っている。この五大リーグをはじめとする海外リーグとJリーグとでは大きな差が特に二点存在する。

まず一つ目は財力である。日本のJリーグクラブで一番の財力を持っていると言われているのが浦和レッズである。2016年度の浦和レッズの広告料収入や入場料収入などといった営業収益は60.6億円で、この額はJリーグで一番の収益である。また、外国人選手や年俸の高いトップクラスの選手を獲得することができ、実際に浦和レッズの選手や監督、スタッフにかかる人件費を見みると23.8億円と、Jリーグで一番の人件費を支出している。

これらのことから浦和レッズは国内におけるビッグクラブと言えるだろう。しかし五大リーグ

にはさらに巨大な額の財力を持つクラブが数多く存在する。特にスペインのレアル・マドリードとイングランドのマンチェスター・ユナイテッドは毎年算出される世界のクラブ収益において1位と2位を競っており、2016年度の収益においては前者が約760億円、後者が約845億円と桁違いの額の収益を得ている。また2016年度の選手だけの人件費を見ても、前者は約491億円、後者は約329億円の額が支払われている。これほどの財力を持っていれば、年俸の高い選手を数多く獲得することができ、チーム力の向上に繋がる。こうして世界的なビッグクラブが誕生するのである。

前述した財力日本トップクラスの浦和レッズと世界トップクラスのレアル・マドリードやマンチェスター・ユナイテッドを比べてみると、収益額は浦和レッズの約12～14倍で、人件費に関しては約14～20倍の差がある。このようにJリーグと五大リーグとではクラブの持つ財力に大きな差があることがわかる。

この財力こそがJリーグのレベル強化、発展に繋がるのではないだろうか。例えば現にトヨタやパナソニック、ヤマハなど世界的大企業がJリーグクラブのスポンサーとなり、資金を投資している。このように他のJリーグクラブも世界的大企業にスポンサーになってもらうことが必要なのではないかと考える。

海外のクラブを見てみるとオーストリアの世界的大企業であるレッドブルは強大な資金力で小さなクラブを買収し、オーストリア、アメリカ、ドイツ、ブラジルに4チームを発足させた（Footmedia 2016）。

このように海外の世界的大企業が日本のJリーグクラブを買収し、強大な資金力でチーム力を上げるといった方法も1つの手段ではないかと考える。

他にも、イングランドとフランスのビッグクラブのなかには、強大なオイルマネーを保持している石油王をクラブのオーナーとしているところもある。そしてスター選手の獲得や名将の招聘、新スタジアムの建築など、クラブ丸ごとオーナー好みの強豪クラブに変えてしまうという方法も存在する。この方法によって国内だけでなくヨーロッパにおける強豪クラブへと発展した。

これらの方法をJリーグで取り入れると、財力

のあるクラブだけレベルの高い海外選手や代表クラスの日本人選手の保有が多くでき、他のJリーグクラブとのレベルの均衡が保てなくなってしまうのである。またそれにより、高い年俵を求める海外選手が多く来日することになるため、日本人選手が少なくなってしまうという弊害も生じる。

実際にヨーロッパの国々のサッカーファンのなかには、オーナーの強大な資金で成り上がったクラブに対してブーイングをしたり、均衡の保てないつまらないリーグになってしまうといった否定的な意見を持つ者もいる。特にイングランドでは、世界的強豪クラブが多く存在し、世界各国からレベルの高い選手が多数集まる。そのため国内の選手がまったく試合に出場できず、代表チームが弱くなるのではないかとファンや協会関係者は危惧している。

しかし、五大リーグをはじめとする海外のリーグは、強大な資金力を持っているビッグクラブが存在するからこそ、多くの選手や監督が集まり、レベルの高い環境でリーグを行うことができるのである。このように、強大な資金力を持った世界的大企業や石油王がJリーグクラブを買収し、ビッグクラブを作り上げることで、日本全体のサッカーレベルや注目度が上がり、日本人選手の個のレベルの底上げにも繋がる。また、多くの世界の選手とサッカーをすることによって世界のレベルを知ることでもでき、常にJリーグで世界を見据えてサッカーをすることができるのではないだろうか。

二つ目のJリーグと海外リーグとの大きな差は人材である。ここでの人材とは選手だけでなく、監督やスタッフといった人たちも含まれる。現在、Jリーグのクラブに所属する日本人選手に世界的スターと呼ばれるような選手は存在していない。また日本代表に選ばれるような選手がいざ五大リーグに行くとベンチに居座る選手が多い。このようにJリーグで活躍し、日本代表に選ばれていても、海外リーグで通用しないのが現状であり、そのような人材が日本で育っていないことに問題がある。

Jリーグと五大リーグなどの海外リーグを比べてみると、Jリーグは全体的に18歳～22歳ぐらいの若手の選手が、先発の11人として試合に出

場する機会やクラブが少ない。一クラブに一人が先発を確保しているかどうかという状態である。

Jリーグクラブの傾向としては、結果を意識するあまり、経験の少ない若手選手を起用することよりも、経験の多い中堅選手やベテラン選手、外国人選手を起用することが多い。そのため若手選手が成長できず、才能を持っていても飼い殺しのために開花しないという悪いサイクルにある。またJリーグクラブは、若手選手を獲得するよりも、即戦力となるような経験のある選手を獲得する傾向にもある。その結果、ある程度才能を持っている高校生や大学生でも、Jリーガーを目指すことを諦めてしまう選手が多く、才能のある若手選手の芽を摘んでしまうのが現状である。これこそが日本サッカーの世代交代がうまく進まない一つの要因である。

一方海外リーグでは、多くの若手の選手が台頭し、ビッグクラブでスタメンを張っている選手も少なくない。なぜなら海外リーグのクラブは、突出した才能を持つ選手がいれば12歳～15歳ぐらいの年齢であろうとすぐにプロ契約を結び、ユースチームやU-23チームに所属させるのではなく、トップチームに所属させる。あえてレベルの高い環境で多くの経験を積ませ、早い段階からトップレベルに適應できるように育成するからである。

Jリーグが海外リーグのように、育成がしっかりしていれば、自然と突出した才能と経験を持つ若手が大勢台頭するであろう。それにより、Jリーグクラブや日本代表での世代交代が進み、若手のうちから世界と渡り合う機会が増え、五大リーグをはじめとする海外クラブへと移籍する足掛かりとなるのではないだろうか。

そして海外クラブに移籍する若手選手が多くなれば、Jリーグに所属する若手選手たちも触発され、海外クラブへの移籍を目指すというサイクルが生まれるのである。それと同時に、Jリーグの注目度も上がることになり、海外クラブにとってJリーグは、有能な若手選手が揃う市場ともなるのである。これは若手選手だけに限ったことではない。25～30歳ぐらいの中堅の選手たちも若手選手の海外移籍に影響され、海外クラブへの移籍を意識し、更なる成長へと繋がることだろう。

この海外クラブへの移籍を意識することが、Jリーグの選手たちの激しい競争を生み、日本サッカーのレベルアップになるのである。そしてこれは選手だけに言えることではない。監督やスタッフにおいても言えることである。

現在、世界で活躍する日本人監督やスタッフは存在しない。一番の問題は言語であるが、通訳をつければある程度は対応できるだろう。ではなぜ海外に日本監督やスタッフがあまりいないのか。これは日本人だけに言えることではなく、アジア人全体として言えることではないだろうか。

なぜなら、アジア出身で世界のクラブや代表の監督を務めている人は全くいないからである。五大リーグをはじめとする海外リーグのクラブからすれば、わざわざアジアというサッカー発展国の人材を獲得するよりも、ヨーロッパや南米といったサッカー先進国から人材を獲得した方が即戦力として無理なく適応することができる。また、ビザや外国人枠という手間もかかるともない。そうした時、アジア出身の人は選ばれないのである。

このような状況の中、日本人をはじめとするアジア人が世界のクラブや代表の監督、スタッフを務めるには、まず自国やアジアでタイトルを稼ぎ、W杯やクラブW杯といった世界的大会で大きな結果を残し世界から注目される存在になることが必要になってくる。ちなみに、日本人サッカージャーナリストの第一人者の西部謙司は日本人監督についてつぎのように述べる。

強豪国とは、代表チームが強いだけでなく監督にも人材を輩出しているわけだ。そうしたバックグラウンドを持てるかどうかは日本にとって優勝への最大のハードルであり、そうなったときには言語やメンタルを把握している自国人監督のアドバンテージが効いてくる。(西部 2015: 174)

彼は続けてこう述べる。

すでに選手は外国のクラブでプレーしているが監督はほとんど外国に出ていない。ヨーロッパや南米のトップクラブを率いる監督が

出てくると、日本人監督で優勝を狙うというプランは現実的になってくる。(西部 2015: 174)

西部が述べているように、日本人の監督やスタッフが世界で活躍し、その経験を生かして日本を指揮することになれば、日本サッカーの発展に繋がると考えられる。

3 国内組と海外組の日本人選手

国内組とはJリーグに所属している日本国籍の選手のことであり、海外組とは海外のリーグに所属している日本国籍の選手のことであり、Jリーグには外国籍の選手も在籍しているが、本稿では、文字数の都合で日本国籍の選手だけに焦点をあてる。

近年、日本国籍の選手が五大リーグをはじめとする海外リーグで活躍しており、彼らの市場価値が上昇している。そして彼らが海外のクラブへ移籍する機会が増えている。たとえJリーグのクラブに所属していなくても、アマチュアのまま海外に渡り、海外のクラブでプロになる選手も少なくはない。

海外組の選手は言語や文化という障害はある。しかしJリーグでプレーするよりもサッカーのレベルが高いため、個のステップアップや世界でどれだけ自分の技術が通用するのかというチャレンジができる。また、海外リーグはJリーグと違って、選手一人当たりの年俸も高いため、海外移籍を希望する選手が多くなってきている。

このように国内に留まるよりも海外でプレーする方がメリットが大きい。また、一人の選手として海外でプレーすることは一つのステータスとなる。実際に日本代表の海外組は国内組に比べ、トラップやパス、シュート、ドリブルなど技術面に関して世界基準であり、ミスも少ない。また、技術だけでなくメンタルや立ち振る舞いなども物怖じせず堂々としている。

一方国内組の選手の技術や判断はJリーグでは通用するが、レベルの高い国際試合では通用しないケースがほとんどである。足手纏いになっている選手や試合から消えている選手が多くいる印象がある。日本代表においても海外組と国内組とでは技術、メンタル、経験といったあらゆる点で差

が開いており、この差を埋めるには、Jリーグに留まるのではなく積極的に海外リーグへ移籍することが必要である。

たしかに現在の海外組は、試合に出場していない選手が多く存在する。しかし、海外リーグでプレーする選手が増えなければ日本代表は強くないのである。いきなりビッグクラブを目指すのではなくベンチに居座らないレベルの海外クラブを見つけ、そこから徐々に移籍を繰り返し、ステップアップをしていくことが海外で活躍するコツではないかと考える。そして海外組の選手を増やすだけでなく、Jリーグ自体も質やレベルを高め、海外リーグに引けを取らないくらいに発展しなければ日本は強くなれないのである。

4 アジアにおける日本サッカー（予選）

日本は、アジアではどのような成績を残しているか見ていく。前述したように、日本は1998年フランス大会でW杯初出場をしてから5大会連続でW杯に出場している。2017年8月にはアジア最終予選を勝ち抜き、2018年ロシア大会の出場を決め、6大会連続でW杯に出場することが確定している。このように日本は4・5枠しかないアジアのW杯予選を6大会連続で勝ち抜くほどの実力を持っており、アジアの国々からは一目置かれている。

またアジアカップという4年に1度の大会で日本は最多の4回優勝を果たしている。これらの成績から、日本はアジアにおいてトップクラスの実力を持っていることがわかるのである。しかし、オーストラリアやイラン、韓国、サウジアラビアといった国々もアジア最終予選を勝ち抜く常連国であり、日本のライバルと言えるだろう。また、中国やUAE、シリア、タイといったサッカー発展国も力を付けてきており、油断のできない状況である。

日本が将来、W杯で結果を残すには、アジアの予選や大会で負けているようではいけない。アジアにおいて常にトップクラスの実力と存在感を示していかなければ、日本サッカーの発展は難しくなってしまうのである。

5 世界における日本サッカー（W杯、オリンピック）

日本はW杯とオリンピックでどのような成績を残しているのか見ていく。前述したように、日本のW杯の最高成績は2002年と2010年のベスト16が最高で、その他の年はグループステージ敗退と、優勝には程遠い結果である。

一方オリンピックでは、1908年のロンドン大会にてサッカーが公式種目となり、日本が初出場をしたのが1936年のベルリン大会である。その後、1968年のメキシコ大会で銅メダルを獲得し、近年においては2012年のロンドン大会での4位という成績が最高成績である。

しかし、アマチュア主義に固執する国際オリンピック委員会は、アマチュア選手のみしか参加を認可せず、1984年のロサンゼルス大会でようやくプロ選手の参加を認可した。そして1992年のバルセロナ大会から23歳以下の選手のみ参加が認可されるという規定が追加され、現在まで続いている。ほかにもオーバーエイジといわれる23歳以上の選手が一チーム三人まで参加できるという規定も存在する。

このように年齢制限などといった規定が設けられているオリンピックでの成績は、世界的に見ても評価の対象にはしづらく、W杯の成績こそがその国の評価の対象となるのである。よって日本が2002年、2010年に残したW杯ベスト16という成績は世界的に見てもサッカー強豪国とは言えない。

日本が将来、W杯でベスト16以上の結果を残すためには三つのポイントが存在すると考えられる。

まず一つ目に経験である。日本はアジアに所属しているため、アジアの国々と対戦する機会が多い。しかし、W杯で結果を残すためにはヨーロッパや南米といった世界の強豪国と対戦する機会を増やす必要がある。なぜならば、アジアの国々ではなく、世界の強豪国を倒していかなければいけないからである。

いきなりW杯で強豪国と対戦するよりは、親善試合で強豪国との試合を多く組んだり、日本に招待するばかりではなく、強豪国に遠征をすることでアウェイの雰囲気を感じ取ること大切になってくるだろう。しかし現在の日本は親善試合の捉え方が甘い。あくまでもW杯のための親善試

合であり、準備や選手選考、戦術の確認という意味や意識が常になければならない。ところが日本の親善試合の意味や意識としては、対戦国を招待することで客を集め、放映権を各放送局に売し、利益を得るというように、W杯どころかエンターテインメントの方向に向かっているのである。この状況を改善するには、日本サッカー協会がW杯で結果を残すという目的意識を明確にし、エンターテインメントの部分を消し去ることが大切である。

たしかに協会としては、日本で親善試合を開催することによって大切な財源確保に繋がることだろう。しかし、協会という組織・団体は財源を確保するために存在するのではない。日本サッカーを発展させるために存在するのである。この存在意義を協会が常に理解し、W杯で結果を残すための育成や強化試合を実行することが日本サッカーの発展に繋がるのである。

二つ目は監督である。前述したように言語やメンタル、特徴を把握している日本人監督が指揮することによって、選手は監督との不具合やストレスなくプレーできるだろう。また過去のW杯優勝国の監督を見ても、他国出身の監督はいないのである。このことから自国の監督がどれだけ重要であるか理解できるだろう。

三つ目に守備力である。現在日本の海外組のDF（ディフェンダー）は四人、GK（ゴールキーパー）は一人と、海外リーグでプレーしている守備的ポジションの選手が少ない状況である。なかでも守備の要であるCB（センターバック）は一人だけである。一方、MF（ミッドフィルダー）やFW（フォワード）といった攻撃的な選手が海外リーグで多くプレーしている状況にある。このことから、海外リーグにおける攻撃的ポジションの日本人選手に対しては一定の評価と需要があると見て取れる。

ではなぜ日本人の守備的ポジションの選手が少ないのか。それは日本人の身体的特徴と指導にある。守備的ポジションは身長が高く、体格の良い選手が担うことがサッカーのセオリーである。身長が低く、筋肉や骨格といった体格の面においても小さい日本人は守備的ポジション、特にCB（センターバック）は向いていないことがわかるだろ

う。

180cmを超える身長で、体格の良い日本人のCB（センターバック）選手もJリーグに存在するが、やはり海外リーグの選手と比べると一回り小さく見える。このように海外リーグからすると、身長や体格が劣る守備的ポジションの日本人選手をわざわざ獲得するよりも、ヨーロッパや南米の守備的ポジションの選手を獲得する方が手間もかからずに済むのである。

また日本の国民性や指導にも問題がある。日本は攻撃的ポジションの選手をクローズアップしすぎているため、子どもたちは攻撃的ポジションの選手に憧れを抱く。そのため子どもたちは、攻撃的ポジションに必要なドリブルやシュートに力を注ぎ込み、守備的ポジションに必要なヘディングやクリア、対人には目を向けないのである。そして指導者たちも攻撃的な練習を多くしてしまう傾向にあり、守備的ポジションの選手がうまく育たない環境にある。

これらの事情から、海外リーグでプレーする守備的ポジションの日本人選手が少ないのである。そのため、日本の守備的ポジション選手と海外の攻撃的ポジション選手がマッチアップ（対峙）した時、個人の実力や経験の差がはっきりと出てしまう。この差を埋めることができず失点を重ねてしまうことが多いのが現状であり、日本の課題でもある。この課題を克服してこそ日本サッカーが世界で通用するようになるのである。

守備力は守備的ポジション選手の質だけではない。失点をいかにしないかというのも守備力である。過去のW杯で優勝したフランス、イタリア、スペインの失点数は、7試合でわずか2失点と圧倒的な守備力であった。このように、W杯では点を取るだけでなく、失点をしないことがいかに重要であるか理解できるだろう。この失点をしないという圧倒的な守備力こそが、W杯で結果を残す最大のポイントではないかと考える。

第3章 日本サッカーをとりまく環境

1 日本のサッカー施設、設備

つぎに日本のサッカー施設や設備に課題はないか、スタジアムや競技場について見ていく。日本

にはサッカー専用スタジアムやサッカーの試合を行うことのできる陸上競技場は数多く存在している。47都道府県すべての都道府県に必ず一つはサッカーの試合が行えるスタジアムや競技場が存在するほどである。

そして近年、Jリーグにおいてスタジアムや競技場に関する規則が定められ、スタジアムや競技場の発展が進んでいる。しかし、日本のスタジアムや競技場は、陸上トラックが敷かれているケースが6割を占め、観客との距離が遠いという問題点が存在する。

たしかにサッカーが行えるスタジアムや競技場が数多くあることは恵まれているが、観客からしてみるとどうだろうか。入場料を払い、スタジアムや競技場まで足を運ぶが、陸上トラックがあるがために観戦しづらいという状況は観客にとって魅力が半減する。このような状況を解消し、サッカー専用のスタジアムや競技場を多くする必要があるのであるのではないだろうか。

なぜならばサッカー専用のスタジアムや競技場は、陸上トラックが敷かれていないため、選手との距離感が近く、臨場感や熱気を間近で感じることができる。そして選手の細かいプレーまで見ることができ、観客としてはお金を払ってまで観戦したいという気持ちに繋がるからである。この気持ちに応えることによって、日本のサッカー熱を高め、観客を増やすきっかけとなるのである。そして観客だけでなくJリーグや選手、クラブにも大きな影響を与えることができる。例えばサッカー専用のスタジアムや競技場を増やすことによって観客が増えれば、Jリーグやクラブは入場料やグッズ代、飲食代などの収益を得ることになる。このように、日本に多くのサッカー専用のスタジアムや競技場を増やすことで日本サッカー全体に大きな影響を与えることができる。

次に、プロだけではなくアマチュアが練習や試合をすることのできるグラウンドについて見ていく。サッカーを行うことのできるグラウンドは日本全国どこにでも存在し、数も計り知れないくらい存在するだろう。専用練習場もあれば、多目的公園、地方公共団体が管理するグラウンドなど様々である。以前は土や荒れた芝生でプレーすることが多かった。近年、人工芝の登場によって天

気や気候に左右されなくなり、質の高いグラウンドでプレーができる機会が増えてきた。

しかし、グラウンドが増えただけでは充分とは言えない。そのグラウンドを多くの選手たちに利用してもらう環境が必要である。現在日本の大半のグラウンドでは、利用手続きや利用料金が必要になってくる。手続きや利用料金を取らなければ管理できないからである。

そこで手続き自体はなくさずに内容を簡略化し、団体のみや年齢などの利用条件をなくし、名前と住所といった個人情報を記入するだけで利用できるようにしてはどうだろうか。そして利用料金に関しても、年齢や利用人数に応じた料金設定や割引制度などを設けるようにしてはどうか。それによって老若男女問わず、気軽にグラウンドを利用でき、多くの人々がサッカーを行うことが可能となるのである。

つぎに、選手が身体を鍛えるための筋肉トレーニングやケアをするためのマッサージなどを行う施設・設備であるトレーニングルームについて見ていく。

サッカーは全身の筋肉や血管、骨などあらゆる部分を動かすため、体力や身体の強さが伴わなければならないスポーツである。またトレーニングやケアなどをせず無理にサッカーを続けると、自然と筋肉や骨などは消耗していき、病気や怪我に繋がる危険性もある。そのため身体を強くしたりケアをすることが大切であり、それを行うことのできる施設・設備が必要になる。この施設・設備こそがトレーニングルームである。

現在、Jリーグの各クラブには専用の練習場だけでなく、クラブハウスという施設が必ず練習場の近隣に設置されており、練習を終えた選手がシャワーを浴びたり、着替えたり、マッサージを受けたり、筋肉トレーニングのために利用したりと様々な設備が完備されている。

このように、日本におけるサッカー施設や設備は充実しているように見える。しかし、筆者がここで述べたいのは、このような充実したサッカー施設や設備を、いかに日本サッカーが強くなるために利用できるのか、ということである。いくらスタジアムや競技場、人工芝のグラウンド、トレーニングルームを新設しても、利用できる人が制限

されたり、需要がなければ意味がないのである。新設するにしても、どこでどんな人が必要としているのか、どこなら需要がありそうかなど、場所や地域の環境、サッカー人口を考慮しながら新設するべきである。

そして今後、サッカーの施設・設備が日本中に新設され、その施設・設備を多くの人々が利用していくことによって、サッカーが更に身近な存在になるだろう。

2 選手の育成

日本サッカーにおける選手の育成についてどのような課題があるのだろうか、まず初めに選手を育成する機関について見ていく。日本のサッカー選手育成機関としては、アカデミー、Jリーグクラブの下部組織、学校教育におけるサッカー部の三種類に分けることができる。

一つ目のアカデミーとは、個人の育成を主な目的とし、学校教育や食事、トレーニング、など生活のあらゆる面をすべて実施、管理する組織・団体のことである。アカデミーにおける学校教育は中高一貫制となっており、普通学校と同じく中学校・高校卒業資格が与えられる。教育方法としては、中学が義務教育ということもあって、公立中学校の授業とさほど違いはない。だが高校になると、単位制となり、サッカー選手としての知識や立ち振る舞いなどを中心としたカリキュラムや進路に応じたコースが組まれている。また食事に関しても、栄養バランスの取れた食事が提供され、サッカー選手に必要な筋肉や丈夫な身体を作り上げるための工夫がなされている。このようにアカデミーは、サッカー選手になるためのエリート育成プログラムが組まれていることが特徴である。

日本のサッカーアカデミーはJFA アカデミー福島、熊本宇城、堺、今治の4団体しか存在せず、海外と比べると極端に少ない。そのため、限られた選手しか育成や発掘ができないという状況である。また、入学金として20万円、授業料などは年間で96万円かかる。そのため6年間在籍させるとなると約600万円もかかるのである。したがって裕福な家庭でなければ、JFA アカデミーに入校させることは難しいという状況である。

一方海外では、国がアカデミーの経費を出費し、

貧しい家庭に対しては支援金を出費するといった国を挙げたアカデミー運営となっている。また国だけでなく、クラブの下部組織としてのアカデミースクールも存在し、世界各地でスクールを開催している。日本においてもドイツ、イングランド、イタリア、スペインの世界的ビッグクラブが日本人向けのスクールを開催している。これは後述するJリーグクラブの下部組織と違い、チームとしての結果を最優先していない。あくまでも海外クラブで行われているトレーニングプログラムを日本で行い、良い選手がいれば引き抜くという個人の育成が優先されているのである。

二つ目のJリーグクラブの下部組織とは、Jリーグクラブが直接運営・指導するサッカー選手育成機関のことである。現在日本には多くのJリーグクラブの下部組織が存在するが、アカデミーとしては成り立っていない。あくまでも一つのチームとして活動しており、トップチームへ有望な若手選手を育て昇格させる役割を担っているのである。

このJリーグクラブの下部組織の特徴としては、個人の育成よりもチームとしての結果を重視している。まずチームとして結果を残すために日々トレーニングをし、その中でトップチームへと昇格する選手やトップチームで活躍できる選手の育成を図るとというのが下部組織の育成の目的である。育成という点においてはアカデミーと同じであるが、前述したようにアカデミーは個人の育成が主な目的であるため、Jリーグ下部組織の育成の目的や特徴とは少し違う。

三つ目の学校教育におけるサッカー部とは、いわゆる部活動のことである。学校教育におけるサッカー部はJリーグクラブの下部組織と同様に、一つのチームとして活動しているが、唯一違う点が存在する。それは、プロサッカー選手に育てるといった選手の育成よりも、チームの結果だけにこだわった指導や戦術をし、それに合った選手を育成していくことである。そのため、個の技術だけが低い選手よりも、戦術理解が高い選手やチームのために犠牲を払ってまでプレーをする選手などが重宝される。このように学校教育におけるサッカー部は、個の技術向上を重視しているアカデミーとは全く逆の立場にあり、チームが勝つ

ための選手育成を目的としているのである。

以上が大きく分けて三種類の日本のサッカー選手育成機関である。現状としてはアカデミーがJFAアカデミー福島をはじめとする4団体、Jリーグクラブの下部組織は51クラブ、学校教育におけるサッカー部は全国に約4000チーム存在している。このように学校教育におけるサッカー部のチーム数が圧倒的に多いことが見てとれるだろう。

つぎにサッカー強豪国における選手の育成はどのようなものなのか以下で見ていく。90年代～2000年代においてサッカー強豪国も日本同様に、世代交代の失敗や若手選手の台頭に苦しみ、次々と没落する国が存在した。そんな中、一度は挫折を味わった強豪国が近年になって飛躍的な成長と結果を残している。その国はフランスとドイツである。

両国の中でも初めに育成に力を入れ、成功したのがフランスである。90年代初め、フランスの各クラブは専用のグラウンドと宿舎を完備し、日常生活からプロ選手にふさわしい生活を身につけさせるエリート育成方法を採用していた。各クラブだけでなく、協会も同様の育成チームを立ち上げ、才能のある若手選手を各地から発掘していったのである。その結果、W杯98年大会の優勝に繋がり、フランスから数多くの世界的なスター選手を輩出するという成功を収めていった。ちなみに日本がW杯に初出場したのが98年大会であり、日本でアカデミーが設立されたのが2006年であるため、日本の育成体制の設立が大変遅れていた。またフランスは、98年大会より前から各クラブの専用のグラウンドと宿舎を完備していたことから、世界的に見ても育成が進んでいたことがわかる。

その後フランスは、ヨーロッパの頂点であるユーロ2000年大会で優勝したものの、W杯98年大会以降の主要大会でよい成績を残せずにいた。そこでフランスはドロップアウトしがちな移民系の選手たちの育成を強化した結果、W杯06年大会、ユーロ16年大会において準優勝という結果を残したのである。現在のフランス代表のメンバーを見ても移民系の選手が半数以上を占めており、今後更に増えることが予想される。

フランスの後を追うように育成に力を入れ、成功した国がドイツである。ドイツはW杯で4度の優勝を果たしており、強豪国の中でもトップクラスの実力である。そんなドイツにおいてもユーロ2000年大会でグループリーグ敗退を喫し、大きな挫折を味わうこととなった。この結果を受けドイツは、元ドイツ代表選手で皇帝と呼ばれたベッケンバウアーの発案で育成の大改革が断行されていったのである。このときの育成改革がドイツ選手の質を変え、W杯10年大会3位、14年大会優勝へとつながった。

ベッケンバウアーの念頭にあったのは、当時成功していたフランスの育成体制であり、彼はその育成体制をドイツ流に変化させた。ドイツサッカー協会は全国366カ所にトレーニングセンターを設置し、約1000人の指導者を投入して10～18歳の才能を逃さず適切な指導の下で開花させる土台を作った。またトレーニングセンターに選手寮を完備し、学校との連携で学業にも力を入れたのである。このように、ドイツはフランスの育成方法を採用し、それを自国流に変化させたのである。またドイツはフランスと同様に、トルコやポーランドといった東欧からの移民の選手を自国に取り込み、積極的に育成を推し進めたのである。その結果ドイツは育成において成功を収め、各年代の世界的スター選手を数多く輩出し、主要大会でも必ず上位に位置している。

そしてこれらの国に負けまいと、イングランドやベルギーといった強豪国も育成に力を入れ、飛躍的な成長と結果を残している。このように近年、サッカー強豪国が次々と選手の育成に力を入れるようになったのは、前述したようなフランスとドイツの成功があったからである。

選手の育成機関の中で、学校教育におけるサッカー部のチーム数が圧倒的な日本は世界的に見ても珍しく、良く言えば日本サッカーの特徴でもある。しかし、世界で結果を残すためには、アカデミーやJリーグクラブの下部組織といったプロサッカー選手を目指す環境こそが大切であり、その環境を日本全国に用意する必要がある。また環境だけでなく、世界で通用するような選手の育成・指導が必要なのであり、フランスやドイツといったサッカー強豪国の最先端の育成技術を指導

者やサッカー協会の関係者が積極的に学ぶ必要がある。これが現在の日本サッカーにおける選手育成の課題である。

3 メディアによるサッカーの取り扱い方

日本のメディアにおけるサッカーの取り上げ方に課題はないのだろうか、以下で見ていく。近年サッカーの人気が出てきたため、テレビ放送や新聞での取り扱い方が大きくなってきた。しかし、今なお絶大な人気を誇っている野球には及ばないのである。シーズン中ほぼ毎晩、主要テレビ局はプロ野球の試合を最低でも1試合は中継し、また、夏や春には高校野球＝甲子園の放送が毎日ある。新聞においても、読売や中日といった新聞社が球団を持っているのだから、野球の取り扱い方は大きくなる。

一方、サッカーはどうだろうか。サッカーは3月～12月にJリーグやカップ戦が開催され、毎週土曜日や日曜日に試合がある。しかし、放送や中継する放送局はBSやCSといった衛星放送が中心である。主要テレビ局の中でも特にNHKがJリーグを放送したり中継することが多い。しかし、放送や中継は、上位対決や強豪対決といった注目試合だけで、毎週必ずされるわけではない。

ではなぜ、ここまで野球とのメディアの取り扱い方が違うのか見ていく。まず、プロ野球のチームは全部で12チームあり、1日全6試合が開催されることになる。一方JリーグはJ1だけで18チーム存在し、1節全9試合が開催されることとなる。J2では1節全11試合、J3では1節全8試合が開催され、合わせると1節だけで28試合が開催される。そのためプロ野球と違って、メディアが取り扱う範囲が広がるため、衛星放送といった比較的番組枠や時間に余裕があるテレビ局や企業が中心となってしまふ。また新聞に関しても、1節全28試合の記録や内容を記事にするのは膨大な量であり、ページ数もかさばることになるため、結果だけの記載や1試合だけにフォーカスした記事になってしまうのである。

一方、五大リーグをはじめとするヨーロッパのメディアは日本と全く逆の状況にある。ヨーロッパに野球というスポーツが浸透していないこともあるが、テレビ放送やインターネット配信、新聞

など、どのメディアをとってもサッカーの情報を伝えることが優先され、国内のメディアだけでなく世界のメディアがこぞって情報を伝え、人々に感動や熱狂、喜びなどを与える。

また、メディアが影響を与えているのはファンや世界の人々だけではなく、プレーをしている選手たちも含まれる。ポジションによって異なるが、ゴールやアシストといった良いプレーをすれば大々的に取り扱われ、世界の人々に見られることになる。そのことによって、市場価値が上がり、ビッグクラブへの移籍のための材料や自国の代表監督へのアピールにもなるであろう。だからこそ選手たちは悪いプレーをしないようにと、常にプレッシャーの中で自分の技術を磨き、ステップアップしていくのである。この環境が当たり前である海外リーグでは、大きな影響力を持ったスター選手が大勢誕生している。このように選手に対する影響はモチベーションに変わり、ステップアップを促していくという作用がある。

今後、スター選手と呼ばれるような日本人選手が誕生すれば、日本国内でのサッカーの注目度や関心度は高くなり、憧れる子どもや後を追おうと努力する選手も出てくるだろう。また、サッカーをあまり知らない人々に対してもサッカーをアピールすることができる。このように日本はヨーロッパの国々のように、国を挙げてのサッカー愛やサッカーに熱狂させる環境を作る必要があるのではないだろうか。そのためにはメディアや選手たちが、サッカーを通じて人々に大きな影響力を与えていくことが大切なのであり、今までの日本サッカーの文化を新たに变えていかなければならないのである。

筆者は、このメディアの影響がこそが日本サッカーが発展するために必要なポイントであると考ええる。

第4章 日本女子サッカーの現状

女子（以下：なでしこ）における日本サッカーの現状について見ていく。なでしこは通称、なでしこ JAPAN と呼ばれており、2011年の FIFA 女子W杯ドイツ大会で優勝、2012年のロンドン五輪では準優勝、2015年の FIFA 女子W杯カナ

ダ大会では惜しくも準優勝と、近年輝かしい成績を残してきている。ではなぜ、なでしこは世界の舞台でここまで結果を残すことができたのだろうか。筆者は、なでしこのプレースタイルに注目して考察する。

まずなでしこは、世界的に見れば選手の身長は低く、小柄である。そのため、ヨーロッパや南米の女子選手と体格やフィジカルコンタクトでまともに勝負したら、簡単に負けてしまうのが想像できるだろう。そこでなでしこは、小柄であることを逆に利用した。それによってヨーロッパや南米の国の選手と比べ、素早く動くことができ、軽やかなプレーが向いている。そのため、なでしこは正確なパスでボールを素早く動かし、ゴールへ向かうパスサッカーのスタイルを主体としている。これは技術や繊細さ、素早さがなければうまくいかない。日本人女性の身体的特徴とパスサッカーというスタイルがうまく合致したのである。

一方、ヨーロッパや南米の女子選手は、足元の技術や繊細なプレーはなでしこには劣るが、体格の良い選手やスピードのある選手、背の高い選手ばかりであるため、ボールをただ蹴ってフィジカルに任せ、ゴールを奪うという強引なサッカースタイルである。このようなサッカーは強引ではあるがシンプルで迫力があり、キックスピードやパワーといった個人の能力が突出する選手が多いのが特徴である。

小柄な選手が多く、組織で戦うなでしこにとってフィジカルサッカーは脅威である。だからこそパスで相手を揺さぶり、局面を打開する。そしてボールを保持し、ゴールまで相手にボールを奪わせない。そのことによって、ヨーロッパや南米の選手が得意なフィジカルコンタクトにもっていかせない。これこそがなでしこ JAPAN の必勝法であり、日本人特有のスタイルであると考えられる。それが徹底的にできているなでしこは世界を相手に結果を残している。

日本男子サッカーもなでしこのように、日本人特有の足元の技術や繊細さ、素早さを大いに活かしたサッカースタイルを確立し、日本人が大事にしている和＝組織力をプラスすることで、強豪国と互角に渡り合えるのではないかと考えられる。

おわりに

本論では、日本サッカーが世界で勝てないのはなぜかを論じてきた。筆者は、日本サッカーの「歴史」と「環境」が世界との差を開かせている要因ではないかと考えた。日本にサッカーが伝えられたのは1873年（明治6年）で、日本サッカー協会が設立されたのは1919年である。世界的に見れば早くにサッカー協会が設立されており、歴史があるように見える。しかし、日本はヨーロッパや南米の国と比べてサッカークラブの創設が遅く、そこから次第に全国各地でサッカークラブが創設されていったのでリーグ戦の創設も遅かった。また、これらのサッカークラブはアマチュアのクラブであったため、アマチュアリーグやアマチュアの大会しか開催されていなかった。そのためヨーロッパや南米といった地域に比べ、日本はサッカークラブのプロ化やプロによるリーグ戦といった大会の開催が大変遅かったのである。こうして日本サッカーは100年以上の歴史があるにもかかわらず、プロチームやプロリーグの創設が遅れたことでヨーロッパや南米の国々と大きな差がついてしまったのである。

この日本サッカーの「歴史」を今更変えることはできないが、新たな「歴史」を作ることはできる。そのためには、サッカー界をリードしている世界の強豪国の育成や強化プログラムなどを積極的に取り込み、日本流のサッカー強化方針を作り上げることが求められる。その強化方針を性別や世代関係なく徹底して実行することで、日本サッカーの発展へと繋がっていくのであり、新たな「歴史」を刻むこととなるのである。

そして育成やメディアといった「環境」も、世界と比べ大きな差が存在している。育成に関しては、ヨーロッパの強豪国と比べ、国を挙げたアカデミーやクラブの下部組織といったプロサッカー選手を目指す育成機関の少なさが差を広げる要因である。そのため日本は、国を挙げたアカデミーやJリーグクラブの下部組織といった育成機関を日本全国に用意する必要がある。また育成機関だけでなく、世界で通用するような選手の育成・指導が必要なのであり、フランスやドイツなどといったサッカー強豪国の最先端の育成技術を指導

者やサッカー協会といった関係者が積極的に学ぶ必要がある。

メディアに関しては、日本サッカーの取り上げ方や重要度が野球に比べ低いため、人々が情報を入手しづらく、またサッカーに熱狂しづらい環境にある。日本のスポーツメディアはヨーロッパの国々のように、国を挙げてのサッカー愛やサッカーに熱狂させる環境を数多く作っていく必要がある。そのためメディアだけでなく、選手たちもサッカーを通じて人々に大きな影響力を与えていくことが大切であり、サッカーの文化を新たに变えていかなければならないのである。

これらが日本と世界との差を広げている要因である。この差を埋めていくには相当な時間と労力が必要になるだろう。しかし、今から改革を始めても遅くはない。むしろ今から始めるべきである。なぜなら日本は、未だサッカー発展途上国であり、これから先強豪国になるためには他国よりも早く多くの経験と改革が必要になってくるからである。日本は歴史上、中国の進んだ文化をモデルケースにして国の文化を築いてきたように、サッカーにおいてもドイツやフランスといった先進国から積極的に多くのことを学び、それらを日本流に変えていくことができる。そして日本人特有の勤勉さ、戦後や震災後からの復興のスピードを見てもできない話ではない。また、ヨーロッパの強豪国も一度は挫折を味わい、そこから育成や強化方針の転換を行ったことで再び成長してきていることを考えると、日本も可能性は秘めているだろう。

そして筆者は、エンターテインメント化している日本サッカーから脱却し、国を挙げた育成や最先端で最高の環境の設置、強豪国に負けない日本人特有の強化方針といった変革が起きることに期待し、今後の日本サッカーに注目していきたい。いつの日か、日本がW杯で優勝できると信じて。

参考文献

FIFA, 2017, "FIFA Associations and Confederations", FIFA.com, Switzerland, ZRH: FIFA (Retrieved October 30, 2017, <https://www.fifa.com/associations/index.html>).

Footmedia, 2016, 「大手スポンサー「レッドブル」がプレミア進出を検討か サッカー界を席巻」, SOCCERKING, (2017年10月25日取得, <https://www.soccer-king.jp/news/world/eng/20161112/514340.html>).

Premier Freak, 2013, 「イングランドプレミアリーグの歴史」, Premier Freak Home England Premier League, (2017年10月30日取得, <http://home.c07.itscom.net/premier/history.html>).

Qoly, 2016, 「なぜ23歳以下限定? 五輪サッカーの謎ルール5つ」, ライブドアニュース, (2017年1月20日取得, <http://news.livedoor.com/article/detail/11870207/>).

公益財団法人日本サッカー協会, 2012, 「第1章 クラブサッカーの歴史1. 世界最古のクラブ」, 挑戦への舞台～TOYOTA プレゼンツ FIFA クラブワールドカップ JAPAN 2012～, (2017年10月30日取得, <http://www.jfa.or.jp/fcwc/2012/11/11.html>).

公益財団法人日本サッカー協会, 2017, 「サッカーが日本に伝来したのはいつ?」, JFA.jp (2017年10月30日取得, <http://www.jfa.or.jp/info/inquiry/2011/11/post-2.html>).

公益社団法人日本プロサッカーリーグ (Jリーグ), 2017, 「About Jリーグ Jクラブ個別経営情報開示資料 (平成28年度)」, J.LEAGUE.jp, (2017年10月25日取得, <https://www.jleague.jp/aboutj/management/club-h28kaiji.html>).

公益財団法人日本サッカー協会, 2017, 「U-23 日本代表 過去の日本代表の戦績」, JFA.jp, (2017年10月30日取得, http://www.jfa.jp/national_team/u23_2016/rio_olympic_2016/history.html).

サッカーキング編集部, 2017, 「最新 FIFA ランクは W 杯抽選のポット分けに影響…ドイツが首位キープ、日本は44位でアジア3番手に」, SOCCERKING, (2017年11月5日取得, https://www.soccer-king.jp/news/japan/national/20171016/656240.html?cx_cat=page10).

サッカーキング編集部, 2017, 「サッカークラブ長

者番付、昨年11連覇のレアルが首位陥落…
約845億円でトップは?」, SOCCERKING,
(2017年10月25日取得, https://www.soccer-king.jp/news/world/world_other/20170120/543482.html).

座間健司, 2016, 「絶対的2強が支配するリーグ、
放映権料分配の改革で新シーズンは変わる
のか?」, SOCCERKING, (2017年10月25
日取得, <https://www.soccer-king.jp/news/world/esp/20160802/475225.html/amp>).

スタジアムに行こうっ! - サッカー生観戦絶対
奨励サイト -, 2010, 「ワールドカップとオ
リンピックってどちらが大きな大会なの?」
リーグ爽快観戦術」, スタジアムに行こうっ!
- サッカー生観戦絶対奨励サイト -, (2017
年10月30日取得, <http://go-stadium.net/sokai/Wcupto5rin.htm>).

スポーティ, 2016, 「日本最古のサッカーチーム、
東京蹴球団。第1回天皇杯覇者は来年で創
立100年!」, SPORTIE.COM, (2017年10
月30日取得, <http://sportie.com/2016/11/tokyosoccerclub>).

スポーティ, 2016, 「プレミアリーグ全20ク
ラブ「選手の給料総額」ランキング!」,
SPORTIE.COM, (2017年10月25日取得,
<http://sportie.com/2016/10/premier-salary-rank>).

たなかあきら, 2016, 「世にも危険なイギリス
サッカー発祥の歴史」, イギリス・ウェー
ルズの歴史 - カムログ, (2017年1月20
日取得, <https://www.rekishiwales.com/entry/2016/03/17/080000>).

西部謙司, 2015, 『サッカー日本代表が「世界一」
になるための5つの条件』, 河出書房新社.